

令和 5 年 5 月 21 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00543

研究課題名(和文) 一致の非対称の統語論

研究課題名(英文) Syntax of Asymmetries in Agreement

研究代表者

小林 亜希子 (Kobayashi, Akiko)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授

研究者番号：60403466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：SV語順のときVはSと豊かな一致をする(I am here.)が、VS語順だとVはSと部分的にのみ一致するか一致を全くしない(There is me.)。このような一致の非対称は世界の多くの言語で観察されている。筆者はこれまで、最新の言語理論を用いて英語・アラビア語およびウェールズ語の一致の非対称を説明できることを示してきた。本研究は理論をより洗練させることで、フランス語・イタリア語およびアイスランド語の一致の非対称も説明できることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

"I am here."や"We are here."ではbe動詞が主語の人称・数に合わせて(一致して)am, areとなるが, "There is me."や"There are us."では, be動詞は主語の数とのみ一致してis, areとなる。このような非対称は世界の多くの言語に見られる。本研究は, それが起こるメカニズムを明らかにしようとするものである。一致は文の意味解釈に全く関わらない, 純粹に形式的な現象である。それゆえに, 話者が脳/心の中でどのように文を組み立てているのかを知る大きな手掛かりとなりうる。

研究成果の概要(英文)：In SV sentences, V shows richer agreement with S (e.g. I am here), whereas V in VS sentences tends to show poorer agreement with S (e.g. There is me). This kind of agreement asymmetry is observed in a wide variety of languages in the world. The author proposed a theory of agreement to explain agreement asymmetries observed in English, Arabic and Welsh. In this project, I have refined the theory and accounted for agreement asymmetries observed in French, Italian and Icelandic.

研究分野：統語論

キーワード：一致 分詞 フランス語 イタリア語 アイスランド語 ラベル 奇態格

1. 研究開始当初の背景

筆者は、これまでに S-V 一致の非対称を導く一致の理論 (Relativized Agree) を提案してきた。これにより、英語・アラビア語・ウェールズ語といった言語に見られる一致の非対称を説明できることを示してきた。研究を進める中で、査読者などから「この説明はロマンス諸語に見られる分詞一致などにも応用できるのではないか」との意見をいただいていた。本研究は、Relativized Agree がそのような他のタイプの一致の非対称の説明にも適用できるかを探究し、一致のメカニズムをさらに精緻化しようとするものであった。

2. 研究の目的

普遍性と言語差異をともに説明できる一致理論を提案する。生成文法理論とくに極小主義プログラムの考えによると、ヒト言語の統語論に言語的差異はない。よって普遍性は統語論に帰することができる。一方、各言語の形態論 (名詞句の構造) はさまざまに異なりうる。普遍的な統語論と可変的な形態論の組み合わせから各言語の一致の非対称を導けることを、実証的に示すことが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 当初は国外でロマンス諸語 (諸方言) のデータを広範に収集する予定であったが、コロナ流行により断念した。

(2) 先行研究によって詳細な記述が得られている標準フランス語と標準イタリア語のみにデータをしばって分詞一致に関するデータの収集とまとめを行った。また、各言語の名詞句の形態論についても詳細に調べた。

(3) 最新の理論を用いてデータを分析し直した。当初は Relativized Agree という独自の一致理論を用いるつもりだったが、近年の極小主義研究の流れと整合するようにラベル付け理論を用いることにした。

(4) この理論を用いてアイスランド語の与格 - 主格構文における一致の非対称にも適用した。

4. 研究成果

本研究の成果は 2 本の論文として発表された。

(1) フランス語とイタリア語の過去分詞一致 (past participle agreement; PPA) に関する研究フランス語とイタリア語では過去分詞が目的語と数・性において一致を示すことがある (PPA)。しかし、PPA のあるなしは次のとおり目的語の占める位置によって異なり、また 2 言語間には共通する点も相違する点もある。

(i) 目的語の位置

- a. 分詞 - 目的語 (移動なし): フランス語: PPA なし, イタリア語: PPA なし
- b. 目的語 (A 移動) - 分詞: フランス語: PPA 義務的, イタリア語: PPA 義務的
- c. 目的語 (接語) - 分詞: フランス語: PPA 随意的, イタリア語: 接語が 3 人称のときは義務的, 他は随意的
- d. 目的語 (A' 移動) - 分詞: フランス語: PPA 随意的, イタリア語: PPA なし

先行研究はこれらの一部の PPA のみを説明しようとするものであり、残りのデータの説明が問題として残っていた。本研究は、ラベル付けアルゴリズムを用いることで統一的な説明ができることを示す。

説明を大まかに示すと次のようになる。

(ii) a. $vP = [Prt-v\ Obj]$ (Prt=分詞)

b. $Obj = [D [Number[数] [N[性]]]] / Pron.Obj = [D [Phi(数) [N(性)]]]$

c. $TP = [Obj\ T\ \dots [Prt-v\ Obj]]$ (目的語が A 移動するとき)

d. $vP = [Obj\ Prt-v\ [t(Prt)\ Obj]]$ (目的語が接辞移動または A' 移動するとき)

(ii-a) のように目的語が移動しない場合、探索子である分詞 (Prt-v) は元位置の目的語と一致す

る(Minimal Agree)。しかし、(ii-b)が示すとおり、名詞句内の数と性の素性は異なる層に存在するため、探索子は直近の目標である数とのみ一致し、数の値を与値される。しかし、一致の形態具現のためには数と性の両方の値が必要である。よってこの場合、形態的な PPA は起こらない。(ii-c)のように目的語が A 移動すると、いわゆる TP のレベルでのラベル付けのために“豊かな一致”が必要となる。すなわち、(A)最小探査は目的語の内部を全て探索して数と性の素性を探し出して、(B)T に与値する。よって目的語(表層主語)と T(コピュラ)は豊かな一致(Full Agree)をするのだが、(A)において探し出された性・数の値が下の分詞にも与値される。よって(ib)の環境では義務的に PPA が起こる。(ii-d)のように目的語が A' 移動する場合、(C)分詞は元位置の目的語と一致することもできるし、(D)エッジ位置の目的語と一致することもできる。(C)の場合は(ii-a)と同じであるから PPA は起こらず、(D)の場合はいわゆる vP レベルのラベル付けの必要から、(ii-c)と同じく PPA が起こる。帰結として、随意的な PPA が起こることになる。ただし、イタリア語の場合は次の原因によってこれから逸脱する結果が生じることがある。まず、イタリア語の 3 人称接語(1o, 1a, 1i, 1e)は性と数が結合しているため、Minimal Agree のオプションを取った場合でも、分詞は性・数を与値され、PPA を起こす。また、イタリア語では Full Agree をした句はその場で凍結してしまうため、(ii-b)において(D)の一致のオプションを選ぶことができない。よって、(i-c)、(i-d)に挙げるような言語差が生じるのである。

(2) アイスランド語における一致の非対称

アイスランド語の SV0 文では S が主格、0 が対格をとり、V は S と一致するのが無標である。しかし S が与格、0 が主格のときにかぎっては、V が 0 との一致を示すことができる。この V-0 の一致にはさまざまな制約がある。本稿では、(i)与格 S が随意的に弱い(optionally weak)格句 KP であること、(ii)主格 0 が人称素性をもつときはその認可のために与格 S が主語位置から外置されること、を主張し、これらを用いることで与格-主格構文におけるさまざまな一致の制約や方言差が説明できることを示した。

説明を大まかに示すと次のようになる。

(i)

- a. TP = [[K DP] V-T DP(3 人称)]
- b. TP = [[K DP] V-T DP(1 人称または 2 人称)]
- c. [K DP] ... PoV ... T [KP(単数)] ... DP(数, 人称)

(ia): 与格主語の主要部は K である。いわゆる TP レベルのラベル付けのため最小探査が行われるが、(A)もし K が弱主要部であれば自動的に T がラベルに同定されるため、Agree なしにラベルが決まる。つまり定形動詞(V-T)は与格主語と一致せず、代わりに主格目的語と数において一致する。(B)もし K が強主要部であればラベル付けのために Agree が起こり、V-T は K の[単数]の値を与値される。すなわち V-T はデフォルトの 3 人称単数形をとり、目的語とは一致しない。(A)と(B)のどちらの想定を好むかの方言差が、そのまま一致パターンの方言差となる。

(ib): 人称素性をもつ主格目的語はフェイズ周縁部の然るべき主要部 PoV からの認可を必要とする。その認可を邪魔しないよう、与格主語は(顕在的または陰在的に)A' 移動する。A' 移動は位置から直接起こるため、(i-c)のとおり、T と主格目的語 DP の間には可視的な KP の A' 痕跡が介在することになる。(C)T は直近の K と一致して[単数]の値を与値される。また、(D)主格目的語 DP は人称素性を持つため、その値も与えられる。このように、2 つの目標から 2 つの異なる値を与値されると V-T の表層形に矛盾する指示が与えられることとなり、結果として(i-b)のような構文は非文として排除される。ただし、(C)と(D)の指示による屈折形がたまたま同じ音形である場合は容認される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kobayashi Akiko	4. 巻 7
2. 論文標題 Past participle agreement in French and Italian: A two-Agree analysis	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Glossa: a journal of general linguistics	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.16995/glossa.5830	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kobayashi Akiko	4. 巻 54
2. 論文標題 Dative as an optionally weak head: Agreement in Icelandic	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in language and culture : memoirs of the Faculty of Law and Literature	6. 最初と最後の頁 35-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24568/54816	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------